

「詩人」の終焉と始発

——林富士馬・公表第一作品の推定、その他

碓井雄一

一

林富士馬研究の基礎作業として精力を傾注した年譜・研究史整理の爲事は、当時としては最も精緻な爲事であったと自負する。費やす労力も一通りではなかった。同様の爲事に当られた経験を持つ研究者からは当然のこととして理解を得られるが、可惜、この種の爲事は「論文」とは見做されず、「その他」として一括されてしまうのである。従って私の研究業績書は「その他」に満ち満ちている。今回も「その他」を充実させる爲事になることと推定する次第である。爲念、私は私の爲事の全てを「論文」のつもりで公表しており、私自身が「その他」と考えたことは一度としてない。

それはさておき、林富士馬という詩人が「詩人」として誕生したのは何時のことであろうか。そしてその詩人主体は、どのように終焉を迎えたのであろうか。如上の問いを設ける

とき、林の生涯にわたる同人誌への執着、始発期への注目と終焉の確認は有意義であると思われる。主宰、あるいは中心として運営に当った同人誌を掲げておく。誌名後マル括弧内は創刊年（西暦略記）、主要同人である。『天性』（40、伊東静雄・大谷正雄）、『まほろば』（42、知念榮喜・山川弘至）、『曼荼羅』（44、個人誌。寄稿に島尾敏雄・三島由紀夫）、『光耀』（46、島尾敏雄・庄野潤三・三島由紀夫）、『新現實』（48、近藤芳美・齋田昭吉・櫻岡孝治）、『三角帽子』（51、絲屋鎌吉・西垣脩）、『プシケ』（52、太田浩・瀬古隆一郎・山岸外史）、『玻璃』（55、太田浩・葉山修平。寄稿に山岸外史）、『ポリタイア』（68、麻生良方・世耕政隆・檀一雄・芳賀檀・眞鍋呉夫）、『公園』（78、伊藤桂一・大森光章・加藤幸子・駒田信一・庄司肇・別所真紀子・眞鍋呉夫）、『行々子』（84、勝呂睦男・千田佳代・森孝一）、『ときじく』（97、碓井雄一・勝呂睦男）。一九五八年七月より一九八〇年九月までの長期

にわたり、『文學界』(文藝春秋)誌「同人雜誌評」を担当したことも周知であろう。

煩を厭わず私が誌名列挙に紙幅を費やしたのは、林の、同人誌というメディアへの執着が、文字通り「詩人」的な感性に基づくものであることを確認したいからである。私的記述を敢えてする。晩年の林の知遇を得た私は林から一三〇通の書信を得ているが、その中、生前最後の同人誌となった『ときじく』発足に際しての二通を掲げておくことも無意味ではないだろう。

冠省。急に思いついたと云うわけでもないのですが、先づはじめ、二人で冊子をはじめてみませんか。お金がないので、どんな形式でもよい、原稿用紙二、三枚くらいの原稿からはじめられます。先づ二人で書いたものを、賛成し、加勢してくれた人に送り、二集、三集と自然と人数も増えたら、と思うのです。忌憚のないあなたの意見聞きたいわけです。とにかく、さっそく実行してみたいのですが、小生、急に羞碌しはじめ、自信ないので、あなたに相談するのです。蟬螂の斧とは知りながら、なにか書き訴えつづけたいのです。誰に?! と云うわけでもないようです。先づ一冊つくり、その趣旨と我々二人の、その創刊号を送ってみたいわけです。

(96・11・17付)

拝復。小生の最後の同人冊子(小生、「まほろば」から何冊の同人冊子を編みつづけて来たことでしょうか。それも貴兄の加勢を得て整理し、自分の唯一の生涯の文学的営為として誇りたい)に賛成して下すつてうれしく思いました。二十三日、おめにかゝることたのしみにしています。貴兄の忌憚のない意見も聞きたい。先づ、誌名を考えておいて下さい。謄写刷りでもよい、とにかく二人で発足してみましよう。何卒、勇猛邁進して下さい。商業ジャーナリズムを(同人冊子の力で)フン砕したい。(略)我々で同人冊子の系譜を樹立して現在の商業ジャーナリズムに充分に対抗してみたいです。当時の商業ジャーナリズムのなかに吸収されることでそれぞれ、「名門同人冊子」の名前が残っています。小生らは吸収されるより、現在の商業ジャーナリズムを粉砕したい。滑稽なことですが、小生の最後の「夢」であります。

(96・11・21付)

齡八〇を超えてなお絶えない詩心を読み取りたい。一通目、
〈蟬螂の斧とは知りながら、なにか書き訴えつづけたいのです。誰に?! と云うわけでもないようです〉の文言がある。
二通目には〈我々で同人冊子の系譜を樹立して現在の商業ジャーナリズムに充分に対抗してみたい〉とある。志は明らかである。林にとって文学とは、いわば見果てぬ夢として抱かれ続けたということである。別書信には〈小さな小さな(併し、

精一杯だった) 小生の「文学的営為」?、あなたの力を借りて、とにかく一人の文学少年(いまは老年)の精一杯の生涯の小さな仕事をまとめて死にたい(96・5・9付)という表白もある。いま・ここにはないものに対する熄むことのない憧憬、ロマン詩人としての林の面目は、いま・ここへの拒絶、いま・ここからの再生という風に保たれ続ける。林にとって同人誌を再編し続けるという営みは、詩人主体再生のために不可欠な試みに他ならなかった。いわば、当為としての反復的同人誌創刊であった訳である。

熄むことのない憧憬は次のように終焉を迎えた。先述の通り、最後の同人誌となったのが、私が編輯作業を一任された『ときじく』である。一九九七年七月創刊、翌年一月発行の第二号が終刊、第二号に寄せた「不思議に海は躊躇うて(確井君宛の手紙)」が林の生前最後の公表文章となった。ここに創刊号掲載「蠅螂の斧」の全文を掲げておく。公共図書館等への寄贈を全く行わず、全五〇部発行の現存部数は私の手許にある一部を含め、極めて少ないと判断せざるを得ないからである。字サゲの処理を施さない。

中学校時代、池田弥三郎君などと始めた回覧冊子から続けて現在まで、絶えず、その時々知り合った友人仲間と、同人冊子を編み続けて来た。今度、この「ときじく」(登岐土玖能迦玖能木実)が最後になろう。又、最後にしたい。編集

一切は確井雄一君が、そのことにあたってくれることになっている。

自分としては、現在自分が身近な人と勝手に考えている誰れや彼への手紙、つまりは回覧冊子の心算である。

何のために書くのか? 書きたいのか? その時々自分の考えや悩みなどを、自分自身のために整理し、明瞭にしたために書く。自分自身を勇気づけるために書く。と同時に、否応なく、自分はこの世間、群衆の一人であることを悟らざるを得ないので、その「群衆に対し」発言したので書く。その発言が「蠅螂の斧」であることは十分に経験し、知っているが、その「蠅螂の斧」を、此の場所で振りたい。

一般には自分の力相応を知らず、自分自身を買いかぶっていることに使われているようであるが齊の莊公は、「蠅螂の斧」を大いに認めていたではないか。

私は現在の商業ジャーナリズム、テレビの番組、週刊雑誌の類が余りに広告に占領されていることに腹を立てている。勿論、民放をはじめ、新聞、雑誌が広告費に頼っていることは知っているが、ちと、ひど過ぎはしないか。言論の自由は判っているが、「報道」の根本は努めて「真実?」を知らせることに勇気を持ち、努力することだと思ふのだが。「報道」にまで「識者、大衆に媚び」低級な娯楽性だけを大切にしていることに我慢出来ない。

林は、いわば紐付きではない文藝ジャーナリズム樹立への志を繰り返して述べてきた。ところで、右の文章において林は〈中学校時代、池田弥三郎君などと始めた回覧冊子から続けて現在まで、絶えず、その時々知り合った友人仲間と、同人冊子を編み続けて来た〉と記している。この〈回覧冊子〉につき私は未確認である。但、「東京は銀座っ子」(池田彌三郎著作集第十卷)月報、角川書店、80・3)においては

池田君は中学四年から慶応大学に行き、塩津君は五年を卒業してから慶応の仏文科に行き、なかなか上級の学校の入学試験を通ることのできなくて、ぶらぶらしていた私も亦、さらに遅れて慶応の文科に籍をおくようになり、さっそく、同人雑誌をはじめたりして、三人はよく銀座で会った。

とも記している。このことについて若干の考察を加えておきたい。

池田彌三郎は「自撰年譜」(前出『著作集第十卷』所収)において、第一東京市立中学校の〈同級生・同期生〉として、館野守男・家永三郎・尾上浩彦の名を挙げている。林の、『著作集』月報への寄稿は池田本人の要請によると考えられるが自然であり、池田において、林の存在は忘れ難く印象されていた筈である。そうであれば、ここに林の氏名も掲げられ

ていて然るべきではないだろうか。そして池田は中学校時代の同人誌発行の件には触れていない。同年譜「昭和九年」の項には、

生家天金の広告雑誌という形で、『ひと』創刊。一号は二月二〇日発行。終刊となったのは一七号、一二年四月二〇日。ほぼ国文科の学生時代と重なり、中途から、国文科の同人雑誌風になった。

とある。〈国文科〉は前掲林文に明らかのように慶應義塾大学、〈天金〉は東京市内でも有名な天婦羅屋である。天金店主の池田金太郎が『ひと』の「編輯兼発行人」を務めているが、実質的には実子の彌三郎が自由に編輯していたものと推定される。発行所は京橋区銀座西五ノ五、天金内に置かれた「天釣居」である。確認し得た各号に(第一二号を除く)、創刊号「一茶序説」を始発として彌三郎が真摯な論攷を精力的に掲載し、井筒俊彦が第二号(34・5)に論攷「言と言葉——ガーデイナ氏の理論紹介」、第七号(35・3)に論攷「文体論概説——バイイ学の根本原理」を、戸板康二が第一三号(36・6)に随想「歌舞伎の嘆き」、第一四号(36・10)に紀行文「大間」、第一五号(36・11)に紀行文「杏掛」を寄せている。昭和學術／文藝史に特異な足跡を残した著述者たちの揺籃とも称すべき、単なる〈広告雑誌〉などではない、品格と余裕を保つ同人誌である。

同誌の第一号〜第七号・第九号・第一一号〜終刊第一七号

を手許にすることができた。林の寄稿を確認し得たのが、第四号「長崎——ある切りぬき」(34・9)、第五号「秋」(34・11)、第一三号「文学少年らしい手紙のことなどの感傷——続長崎記」、第一四号「鼠」に就て、第二六号「稽古草子」(37・1)、以上である。

池田の回想に林のいわゆる〈中学校時代の回想冊子〉への言及がないのも釈然としないものがあり、林の「東京は銀座っ子」における回想では〈慶応の文科に籍をおくようになり、さっそく、同人雑誌をはじめた〉と明記されていることから、「蠅螂の斧」における回想〈中学校時代、池田弥三郎君などと始めた回想冊子〉は、林の記憶違いではないかと思われる。『ひと』未確認分第八号・第一〇号の探求に努めることは勿論であるが、慶應義塾大学予科入学(32・4)・中退(38・3)、日本医科大学予科入学(同・4)の間の動向に鑑み、林の最初の公表文章は「長崎——ある切りぬき」であるとする時点では推定しておきたい。以下に全文を掲げる(傍点原文)。字サゲの処理を施さない。

僕——早岐で長崎行きの列車を待ちながらトランクを膝にして葉書を書いた。葉書は魚の匂がした。始めてのたばこに心もち震えながら、隣寸をすった。煙が白い鱗雲の如くに綺麗である。午前四時を掛け時計が欠伸する。

旅——なにもかもサイダー壺と一緒に捨て、しまつて食堂

車に出掛けやう。夜通し枕のなかを往復する機関車。床のなかで海が舌なめずりをするし、市電が耳のなかで揺れる。茶代はいくらくらい置くものだらう。

長崎——日本に生れた「わたしのクリスト」は必しもガララヤの湖を眺めてゐない。赤あかと実のつた柿の木の下に長崎の入江が見えてゐるのである。(芥川龍之介)

大浦天主堂——天蓋はほんのりと黄がかつた優しいみぶ。色に彩られ猫の目のやうな星が光り鏤めてあつた。青、赤、黄、緑、紫、だいたい、の硝子窓を透して白昼初夏の太陽に南歐風小径の蔓薔薇が、青、赤、黄、緑、だいたい、紫の七色彩にながめられる。長崎港は塀の窓越しに、きやまん細工だ。

日本の聖母まりあ像——めをとちるとわたしはすつかりあなたになつてしまふ。わたしはながさきにゐる。あなたは今どこにゐるか

又——遠く離れてまた得難き人を思ふ日にありて、われは心からなるまことの愛を学び得たり。それは求むるところなき愛なり。それは信ふかき少女子の願ふことなき日も、聖母マリアの像の前に指を組む心なり。(佐藤春夫)

又——その時から、まもないほどと覚えまうする。をなんごの姿がふと町から消えた。小町はけいせい売られた、いな唐人に買はれたなど云ふ噂を耳にしようしたが、こどもなれば、たづねやうすべも無うて、たゞ今はあらぬをんなごの事ばかり恋ひつめて、あにまのぬけたやうに、あぢけなう日

を送りまうした。……

図書館——人々はみんな親切である。すくなくとも長崎の
巡査は情が濃やかである。が小規模の博物館を兼ねてゐる長
崎の図書館では紹介状のない僕はどうすることも出来なかつ
た。のみならず帽子を脱いで読書せよと叱られた。聽て書庫
に案内される人を羨望しながらもらへたかも知れないN氏の
紹介状が惜しくてたまらなくなつたばかりでなく、科挙画報
をめくりながら勲章を獲得しなければとつくづく発憤した。
机に頬をつけてゐると蝶々がはいつて来る。蝶々は肋骨の飾
にならぬか。

しかし——浜町通りの橋にぼんやりもたれてゐると美しい
女の人が声をかけられた。襟に毛虫があるからとつてやらう
とのことである。註に曰く、浜町通りとは長崎銀座である。

丸山花街——さあどこでしたらうか。

福濟寺——長崎市を俯瞰すると黄瀛氏の詩で彫つた版画が
展望される。詩集の装幀に美しい海の色彩だ。教会堂の尖塔
からオルガンまでひびいて来る。港は鶴に似てゐる。尤もこ
の翼にそらの青が少し重すぎる。

浦上天主堂——隅に紅金巾の帷の垂れた懺悔台の椅子があ
る。アナトオル・フランス氏が熱心に「西方の人」を読んで
ゐるが振り向かうともしない。僕も持つて行つた宮本顕治氏
の文学評論集を懺悔椅子で勉強した。こんな書齋がほしい。
そとに出たら夕焼けがまつ赤にたゞれて美しかった。何故だ

らう途中瞥見した八幡の溶鋸炉の火花が目なかで咲いて、
散つた。

まりあ観音——それはアプトン・シンクレアの書いた「人
類の生んだ最初の革命家の姿」ではない。芥川氏を動かした
クリストの一生は「天上から地上へ登るために、無残にもお
れた梯子である」(宮本顕治)

三菱造船所——牡蠣のやうに喰ひさがつてゐるのがそれで
すよ。

活動小屋——座布とんを敷いて眺めてゐると、ふいりむの
なかまで上海丸の出帆汽笛がひとをさがしに来る画面は一杯
の霧だ。トーキーは随分昔からあつたのさ。

夜——叔父さんと歩きながら奈良と京都と長崎の話をした。
石垣が歯を磨いてゐる。昼ま仏蘭西の三色旗を飾つてゐたモー
ターボートの上に紙細工の三ヶ月が懸つてゐる。尤も此の土
耳古の旗は潮でくちやくちやにしめつて長崎の灯は女の人の
瞳のやうにひとつひとつが濡れて光つてたび人を南蛮人にし
てふ。

叔父さん——にいさん、生徒は何人くらいゐるのですか。
いま、六十人くらいしかゐない。せめて百五十人位になると
いゝのだが。瓊波裁縫女学校は本石灰町にある。だから女学
生は娼妓的婦藝妓御紹介と云ふ看板のある格子戸を何軒も通
つて通学しなければならぬ。にいさんが今日は書取の試験を
してゐる。

崇福寺——朱塗の竜宮門の下に立つてゐるとへんに腋臭の匂ひがする。魚ではない。葡萄牙人、阿蘭陀人、唐人、西班牙人、さうして長崎の先覚者達の豪華な集會事務所。絵画、陶器、更紗、牙彫、鍍金、今日は趣味雑誌の編輯會議だ。司馬江漢筆蘭人、古伊万里の茶碗に描かれた甲比丹、唐波の花の間に止まれる鸚鵡、金象嵌の伴天連、種ヶ島、牙彫の基督、陶器の麻利耶觀音、長崎画の仏蘭西人、あるじせすきりしとびるぜんまりや、あんじよ、はらいそいんへるの……

石橋——日本ではじめて鼻眼鏡を掛けたのは此の橋ですよ。立ちこめる兩岸の緑の黄昏れに煙つて次々に連る石橋遠景の異国風景は褐色になつたハイカラなお祖母さんの写真を想ひ出させる。変色してゐるが珍らしいばかりでなくなつたらなくなつたらしい。渡来オスカーワイルド氏にはどの辺に立つてもらつたら似つかはしいのだらうかしら。

洋館——古風な長い間風雨に露された洋館が夏蔓などに抱かれてゐる。窓が眼窩の具合に眺められ、指をうゝ込むと赤あかとした夕暮がたまつてゐる。長崎版画などにある異国的な風景や物語を眺めて来た窓だ。裏は掘割で泥が流れてゐる。長崎ステイション——僕は毎朝出掛けて来て椅子で葉書を書き、煙草をふかしながら頭のなかで林芙美子氏の小説をめぐつた。列車が着く折は入場券を買つて待ち人のある様な氣持になることにした。上海は次の停車場である。

茂木枇杷——枇杷の比ではない。少女達の美しさは、それ

に枇杷より大輪だ。味は——僕は知らない、が此処の枇杷の味は忘れることが出来ない程なのだが……

諏訪神社——

The Suwa Zinsha

Nagasaki, Japan.

The Written Oracle No.7

Lucky in the End.

It is just as a bird has frown away from its cage.

One who has drawn this lot will be interrupted in doing

anything that he is anxious to undertake,

but if he is careful not to do it in a hurry

he will get rid of that obstacle.

Chance. Bad it first.

Wishes. Will be fulfilled

though things seem bad at first.

Illness. Will cause no trouble.

Marriage. not good, better to postpone.

Trip.

Person expected.

Message.

.....

.....

船——僕が叔父さんに送られて船に乗つたのは雨の降る日

であつた。棧橋が上下に揺れた。小さな船だが海はそと海だ。風が払塵をかり船が膝を押し縮めする。鏡のなかで顔と顔とが船酔ひする。十七八歳の怪しげな小娘が怪しげなことをしてゐる。確に眠つてはゐない。空も海も一色で海が空になり空が海になり船が天井を這ふ。佐世保港外は鯨もゐるが、ふかの名産地だと云ふ。警笛が鏡のなかでちぎれる。胃のなかでペンキがかぶかぶする。目をとちてあの人をこわさないやうに——。

そして——先生は僕に作文が書けたかとおつしあるのである。僕が慶応の文科に入つてから何かあるたびに僕をさう・激励される。僕は始めて作文を——書いた。何よりもと思つて只今着京致しました旅中は色々とお厚情を得……と云ふ葉書と一緒にこの作文を書いたのである。作文は未だ船酔ひを反芻してゐるが先生は頓着なく愛読されるに相違ないのである。勲章をもらへる小説を書くまでは安心して先生に僕の作文を捧げることにする。壊れたあの人は旅愁のチューイングムではどうにもならぬ。三菱造船所が歯ぎしりをしてゐる。鏡のなかで僕のいがぐりが青く光つて行く。(右)

いささか奇を衒つた感のある詩句も散見されよう。しかし、若書きであり、表現することの喜びが直截に伝わって来て衝奇の感を消しているように私は受け止める。この(推定)第一作品は副題削除・改稿の上、第一詩文集『誕生日』(自家

版、39・6)の巻頭詩に選ばれる。詩人主体の再生Ⅱ(誕生)の様が見事に明瞭である。長詩であるがこれも全文を掲げて置く(傍点原文)。字サゲの処理を施さない。

僕——早岐駅で長崎行きの列車を待ちながら、スウツ・ケースを膝にして葉書を書いた。朝、葉書には羽根がある。夜には魚の匂ひがする。はじめての旅、そして僕の流浪がはじまつた。葉書のなかだけに記録された生涯。はじめてのたばこに、十八歳が震へながら燐寸をすつた。たつたひとり構内に起きてゐて、おんなじところを、行つたり、来たりしてゐる不眠症の大きな掛時計。思ひ切つた欠伸で三時を知らせる。下駄の歯音が暗い街にひびき渡り、やがて汐の臭ひが朝風をはこんでくる。

旅——サイダー壘と一緒に車窓から捨ててくだいて了ひたいものがある。特別急行列車の食堂の献立には、白布に敷殺した鶏が出る。又琵琶湖や浜名湖や富士山までが盛られる。夜通し機関車が枕のなかを往復する駅そばの旅館。床のなかで海がいつでも舌なめずりをしてゐる。茶代はいくらぐらい置くものかしら。

長崎——日本に生れた「わたしのクリスト」は必ずしもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと実のつた柿の木の下に長崎の入江が見えてゐるのである。

大浦天主堂——天蓋はほんのり黄がかつた優しい水色に着

彩され、猫の目のやうな星が無数に鏤めてある。青、赤、黄、緑、紫、橙色のモザイクの菱形や正方形の硝子窓を透して、白昼初夏の太陽に照し出された南欧風小径の蔓薔薇が、青、赤、黄、緑、紫、橙色に、縫取りのやうにながめられる。土塀の覗窓に置かれて、長崎港はぎやまん細工だ。

日本の聖母まりあ像——目を閉ぢるとわたしはすっかりあなたになつてしまふ。わたしはながさきにゐる。あなたは、いま、だれに抱かれて、どこにゐるか。

又——その時からまもないほどと覚えまうする。をなごんこの姿がふとまちから消えた。小町はけいせいに売られた、いな唐人に買はれたなどと云ふ噂を耳にしました。が、こどもなれば、たづねやうすべも無うて、たゞ、いまはあらぬをんなごのことばかり恋ひつめて、あにまの抜けたやうに、あぢけなう日を送りまうした。やがて耐へかね、をとこんこは、唐人のまちにあてもなうひとりたび立ちまうした。……

図書館——人々は皆親切であつた。なかにも公園の入口の交番の巡查は、退屈してゐていかにも親切であつた。が小規模な博物館を兼ねた図書館ではみじめであつた。名士が多く来過ぎるのであらう。帽子をとらないで読書すると云つて大声に叱咤されたりした。科学画報をめくりながら、かなしかつた。緑色の雨に濡れて、窓から蝶々が舞ひ込んでくる。

浜町——ここは長崎銀座。鰐甲細工、長崎縫針、カステラ、寒菊、文旦漬、東坡肉。通りの入口の橋桁にぼんやりも

たれてゐると、美しい若い御新造に声をかけられた。襟に毛虫がついてゐるといふのである。いつまでも少年でゐたいと悩んでゐた。大人になりかゝつた肉体が湯屋の鏡に映るあの絶望。

丸山花街——地図で見ると、市の真中。こゝの絵葉書はいつとも昼間。千人風呂みたいに、いつでもひっそりしてゐる。

福濟寺——長崎市を俯瞰すると、海が鯖の背中より青い。緑の鑑戸のある教会の尖頭からオルガンが響いてくる。長崎は日本からも支那からも切支丹の本国からも遠い。重り合ひ段々になつてゐる屋根瓦を太陽が目殻にしてゐる。

浦上天主堂——隅に紅金巾の帷の垂れた懺悔椅子がある。アナトオル・フランス氏が熱心に「西方の人」を読んでゐる。庭には白い百日紅の花盛り。八幡の溶鉢炉よりまつ赤にたゞれた夕焼け。

まりあ観音——それはアプトン・シンクレアの書いた「人類の生んだ最初の革命家の姿」ではない。芥川氏を動かしたクリストの一生は「天上から地上へ登るために、無残にも折れた梯子である。」(宮本顕治)

三菱造船所——牡蠣のやうに海にへばりついてゐる。肋骨のなかを汽船が通る。吾妻橋を電車が通るやうに。

活動写真——今日も座蒲団代にぎつて南座で活動写真をながめて暮さう。ふいるむのなかまで上海丸の出帆汽笛がひとをさがしに来る。画面は一杯の霧。昨夜大波止の居酒屋で

トミー爺さんはコップを前に置いて、睡つたまゝ死んださうな。

夜——叔父さんと大波止から海ぞひに大浦海岸を歩く。石垣が齒をみかいてゐる。昔並んでゐた阿蘭陀の酒場が朝鮮料理に代り、黒人がピアノを鳴らす代りに、夜釣をしてゐる職工さんがゐる。左の山手に緑色のペンキ塗の古い木造洋館。右にサンパンの岸が並ぶ。昼間、仏蘭西の三色旗を飾つて、朝刊に冒険談が出てゐたモーターボートの上に、土耳其の旗のやうな月。犬の影が道を大きくふさぐ。

叔父さん——にいさん。生徒は幾人くらいゐるのですか。さう、いま六十人くらいしかゐない。せめて百五十人になるといゝのだけれど。瓊波裁縫女学校は、本石灰町にある。だから袴をつけた生徒達は、娼妓、酌婦、藝妓、御紹介と云ふ看板のある格子戸を何軒も通り抜けて通学しなければならぬ。昼休みの時間、僕はハーモニカで流行歌を歌つた。大評判であつたと真面目に、にいさんは云つた。にいさんがいまは書取の試験をしてゐる。ちつとも売れない原稿ばかり書いてゐた兄さんは、こゝに養子に来てからは別人になつてゐた。

崇福寺——朱塗の竜宮門に立つてゐるとへんに腋臭の匂がある。きくの匂ひ。葡萄牙人、阿蘭陀人、唐人、西班牙人。みな乙姫様をさがして。絵画、陶器、更紗、牙彫、鍍金。唐波の花の間に止れる鸚鵡。金象嵌の伴天連、種ヶ島、牙彫の基督、陶器の麻利耶観音、長崎画の仏蘭西人。あるじせずき

りしと、びるせんまりや、あんじよ、はらいそいんへるの。司馬江漢の蘭人。古伊万里の茶碗に動こうとしない甲比丹。安土に大名の子弟を教育する和仏学校が出来た時織田信長は、聖フランシス、サビエルの真似をして日本で始めて帽子をかぶつて、得意然と列席した。

石橋——日本ではじめて鼻眼鏡をかけたのは此の眼鏡橋。立ち込める兩岸の緑の黄昏れに煙つて、次々に連なる大井手橋、編笠橋、古町橋、一覽橋、眼鏡橋、袋橋、この異国風景は洋服で傘を持ち花をかゝへた褐色に色褪せたお祖母さんの写真を思ひ出せる。色が褪せてゐることが、又これ以上真似の出来ないハイカラさを作り出してゐる。アンドレヂットのオスカールワイルド論。江戸の日本橋、岩国の錦帯橋、そして。洋館——長い間風雨にさらされペンキのはげた木造洋館が夏蔓に抱かれて立つてゐる。窓に指をつつ込むと、赤あかとした夕焼けがたまつてゐる。だまつて様々な異国的な風景や物語をながめて来た眼高だ。裏の掘割に泥がながれてゐる。

長崎ステイション——僕は煙草をふかすのがすつかり上手になつた。自働電話で五錢ピアノを聞く代りに、人を待つやうな気持になつて赤い入場券を買つた。生み立て卵のやうな入場券である。上海は次の停車場。きくはどこにゐる。

茂木枇杷——ブリキ細工のやうな小汽船が絶えず扇をひろげてゐる。唐八景から見下される枇杷の産地。きくの中からではじめてをんなを知る。

諏訪神社——The Suwa Zinsha, Nagasaki, Japan.

The Written Oracle No.7. Lucky is the end.

It is just as a bird has flown away

from its cage. Chance. Bad at first.

Wishes. Will be fulfilled

though things seem bad at first.

Marriage not good, better to postpone.

船——雨の降る日叔父さんに送られて僕は船に乗った。棧橋。僕は小さい船でこの外海を渡らねばならぬ。風が滅茶苦茶に、はたきをかける。岩はどこでも膝をのびしたり縮めたりして船を見送る。十七八歳の小娘がをかしなことをしてゐる。たしかに眠つてゐない。胃のなかでペンキが、かぶかぶする。こゝは佐世保港外の鯨の産地。胸のなかにきくをこわさないやうに。僕は石鹼の匂ひにかぎいつて船酔と闘つてゐる。旅。一九三二年

初出と比較、詩の表現として格段に洗練されていることは明らかである。『誕生日』一卷については他所で解析を試みたので繰り返さないが、見られる通りの詩表現の洗練が詩人主体の確立を強く印象付ける。同時に、漸層的に招き入れられる(きく)の性的イメージが、(大人になりかゝつた肉体が湯屋の鏡に映るあの絶望)を抱える青年の成長、それは成

長、あるいは多分に自然過程的な成熟と言うより、意志的に選ばれる社会的／性的人間の誕生をも伝えていることに注意を向けておく必要があるだろう。

『誕生日』には佐藤春夫が慈愛に満ちた「序に代ふる文(その処女詩集誕生日に題して少年の友林富士馬君に与ふ)」を寄せている。

詩人の道は生涯の道であり、荊棘の道である所以のもの。君ももう十分に知つてゐる通りである。君が自分の門に来て君の志を陳べた時、自分は君の再考を促したの。はつい昨のやうに思ふがもう八年になるとか。その間につくづくと君を観るに君も亦、気の毒にも生れながらの詩人である。——異常性格者である。

佐藤の序文に対して、林は「自序」で次のように応じる。同人誌を通じて詩人主体の再生を繰り返す、自身の以後の文学的生涯を見通しているかのような記述である。

けれども、今日こそは、疑ひもなく、私の誕生日である。いま迄の、無意志的な、私の少しも関知しない、あの誕生からの、だからと惰性的に伸びて来た、その日暮しの一日ではないであらう。私は死ぬことが出来なかつた。自分で、この生涯を持つことを覚悟する。ひとつ、死ぬまで生きて行つてみよう。

その、ほんとうの誕生日に、私はいま迄書いて来てゐ

たものなから、これだけを纏めてみた。見すばらしい過去を、いまこそ素直に受取つてやらうと決心した。その外にこの世に於ける、誕生日の持ち方を知らないのである。

いち日、私は祭日のやうに、楽しく、この仕事に従事し、原稿を纏めた。いま私は明日の、困難に就ては、考へない。

佐藤は的確に林の資質を見抜いている。〈詩人の道は生涯の道であらう。同人誌というメディアに拠つて自己衝動的に詩人主体の再生を志向し続ける、佐藤の言葉通りの、林の文学的生涯であつた。私事にわたることをお許しいただきたい。〈君も亦〉〈異常性格者である〉、この選別な餞に喜んで若い日を嬉しそくに回想する林の温顔が忘れられない。昭和文学史上無視することのできない足跡を残した一人の詩人の、終焉と始発の確認／推定という本稿の志向が無意味ではないことを信じたい。

【注】

(1) 「林富士馬年譜稿」(近代文学資料と試論の会『近代文学資料と試論』1、03・11)、「研究動向 林富士馬」(昭和文学会『昭和文学研究』60、10・3)、等。

(2) 当時最も整備された林富士馬年譜は、志村有弘編『林富士馬評論文学全集』(勉誠社、95・4)所収の同氏編「林富士

馬・文学年譜」である。志村氏は林に関する情理兼ね備えた発言を重ね続ける研究者であり、私を得た学恩も多大であるが、例えば同年譜が「昭和十四年六月」の『誕生日』刊行から始められてそれ以前が不分明、先ずその期間の動向を補い、散見される誤記、例えば「日本教育新聞」とある紙名を「教育日本新聞」に訂正、等々の次第である。補遺の結果倍旧の資料を明らかにし得た。

(3) 『曼荼羅』については未実見。犬塚潔は「三島由紀夫と林富士馬——林富士馬先生の霊前に捧ぐ」(松本徹他編『三島由紀夫研究』13——三島由紀夫と昭和十年代)鼎書房、13・4)において、同誌創刊号、第三号(以上実見か)、第四号(未実見のよう)、〈伊勢丹デパートの三島由紀夫展パンフレット(昭和54年)〉等で書影を確認できると明記、良心的である)の書影を掲げている。犬塚氏も述べる通り、同誌の発掘は絶望的なのではないかというのが私の実感である。

(4) 当連載の初回で林は「同人誌を発行すること」について、紙幅の大半を費やして熱弁を揮っている。その初回当時につき、小説仕立て(作中で林は柚木柱馬)であるが葉山修平は『美の使徒』(龍書房、07・7)において、〈同人雑誌をバカにしているとしか言いようのない〉という抗議とともに、〈1、なるべく多くの同人雑誌を取り上げる 2、作品名、作者名、雑誌名を上げて、その内容を紹介する 3、あらずじを述べる。不可能ならば作中人物名とか、事件とか、背景とかを、短くともいいからしるす〉という要求を掲げた封書が『文學界』編集部に届いたことを伝えている(この件については私も林から直截に確認している)。

(5) 大森光章は『たそがれの挽歌』(葎柿堂、06・5)におい

て、〈文壇に沢山の友人・知人を持ち、それらの人たちとの交友録もかなり書いていながら、口を開けば文壇や文芸ジャーナリズムを批判し、晩年まで同人誌の発行を企画・実践した。その意味では行動に矛盾があり、常識では理解できない一面もあったが、彼を知る者で、彼の純粹無垢な人柄を疑う者はいなかったらう〉と述べ、林を〈文壇のドン・キホーテ〉と評して的確である。

(6) 拙稿「林富士馬・資料と考察——(四) 始発期作品二篇の翻刻」(近代文学資料と試論の会『近代文学資料と試論』7、07・12)では、日本医科大学予科における林の同級生・後藤光正の私宛書信(98・2・15付)を引用した上で、

(後藤書信の文面を受けて) 日本医科大学在学中に林が関った同人誌の概略が判然とするだろう。予科入学が昭和十三年四月、この年の六月に発行された『武蔵野』創刊号に、早速「空花雑章——新しき友へ」を寄せている。管見の限りこれが活字になった林の最初の文章である。同年十二月発行の『ぶるす』第四号には「てんで常時的な余りにも反時的な——空花雑章」を寄稿(同誌第三号は十二月十二月発行、林は関りを持たない)。どちらも雑然とした断片の集成である。しかし、「てんで常時的な余りにも反時的な」の方には大学での林の日常が、誇張の過ぎる自嘲、といった感もあるが活写されていて興味深い。

と記した。詳しくは史料的な価値を持つと信じる拙稿を参照されたいが、この記述をここで訂正しておく。

(7) 「林富士馬『誕生日』論」(文学と教育の会『文学と教育』38、99・12)。また伊東静雄との詩想の響きあいという観点から収録詩篇の何篇かを論じた、「林富士馬・資料と考察

——(一六) 伊東静雄と響きあう詩想」(近代文学資料と試論の会『近代文学資料と試論』9、08・12)がある。

林富士馬の発言引用の一切は原資料(初出誌/初版/書信、等)に拠る。従って佐藤春夫「序に代ふる文」の引用も同様である。